

〔補足資料〕 (18.9.11)

「第二バチカン公会議による教会のイメージ・チェンジ」
(Richard P. McBrien, *The Church: The Evolution of Catholicism* による)

終末的共同体としての教会

教会は、結局、神の国との関連においてしか理解されない。

つまり、教会を自己目的にするのではなく、教会は、先にある神の国の手段、表示、そして前兆に過ぎないのである。

だから、『現代世界憲章』は、以下のように述べている。

「教会は世を助け、世から多くを受けながら、一つのこと、すなわち神の国が到来し、全人類の救いが達成されることを目指している」(45項)。

これは、公会議以前の勝利主義的自己理解とは対照的である。つまり、教会を神の国と同一視していたことに対して、教会は、神の国の完成を目指して歩み続けている旅する神の民であるという自己理解に切り替えたのである。

以下に対照的イメージを示す。

公会議以前の教会論

制度としての教会

位階制度の教会

宣教：ことばと秘跡

絶対的君主制の教会

唯一、真の教会

勝利主義 (教会=神の国)

公会議の教会論

神秘と秘跡としての教会

神の民である教会

宣教：ことば、秘跡、奉仕者

交わりである教会

エキュメニカルな共同体である

終末的共同体である教会